すいたレポート

吹田市の「ゲリラ豪雨」対策は万全か

千里山東公園
地下には巨大な調整池が…

今年の酷暑は異常だった。ギラギラと照りつける太陽、熱中症で倒れる人が相次ぎ、寝苦しい熱帯夜が続いた。コンクリートで固められた大阪は「ヒートアイランド現象」のため、さらに蒸し暑く、沖縄より気温が高い日も多かった。

そんな酷暑について回るのが局地的な「ゲリラ豪雨」。異常に温められた空気が上昇気流となり、瞬時に雲が発達しゲリラ豪雨が各地を襲う。もちろんわが吹田市も例外ではなく、近年たびたび激しい豪雨に襲われている。吹田市ではこの「いつ来るか分からない豪雨」にどのように備えているのだろうか？気温40度近い残暑の中、吹田市のゲリラ豪雨対策を取材した。

なんと25mプールで約35杯分も貯まる

「着きました。ここですよ」。市役所下水管理課の職員さんに案内されたところは、千里山東公園。阪急関大前駅と千里山駅の中間点、上の川沿いにあるきれいな公園だ。なんとこの公園の下には貯水量9100㎥の巨大な調節池が眠っているのだ。

「大きさはどれくらいですか？」

「縦40m、横57m、深さ8mの巨大な池ですね」

「雨水はどれくらい貯まるんですか？」

「25mプールで約35杯分です」。

さっそく中へ入ってみよう。

ギーッというきしみ音を立てながらドアを開け、階段を下りる。

雨が上がり、水位が下がってからポンプで排水します

「うわーっ、これは巨大な空間ですね」

「こちらが吐口、つまり雨水の侵入口です。降雨時には地上の川へ流さず、ここから水を落とし込むのです」。

調整池の中央には大きなポンプが備え付けてあって、豪雨がすぎさった後に、たまった水をポンプアップして上の川へ流す。

この調整池ができたのは、2003年。それまでは上の川上流一帯、つまり千里山・佐井寺地区が急速に開発され、田んぼや竹やぶが姿を消し、自然の保水能力が減少したため、この地域はたびたび床上、床下浸水などの被害が発生していた。この調整池ができてからは、昔のような洪水被害は今のところなくなっている。

各家庭での雨水貯留タンクの設置も助成

吹田市には、このような調整池のほかに小規模な遊水池を設けたり、大きな雨水管を施設したりして、洪水を未然に防いできた。

しかし昨今のゲリラ豪雨は、これまでの常識を覆すほどの激しさで都会を襲っている。

吹田市では雨水貯留タンク設置助成制度を開始した。各家庭にこのタンクを設置することで、暑い夏の散水や打ち水などに雨水を利用しながら、大雨時の浸水被害の予防に役立てようという試みだ。豪雨の際には、浸水地域に前もって土のうを設置するなど、文字通り浸水を水際で食い止めるサービスも行っている。来年はもっと暑い夏になるのだろうか？地球温暖化対策は待ったなしである。

大雨時には「上の川」の雨水が流れ込む仕組み

一見すると何の変哲もない児童公園の下に巨大な調整池が

カンダハールで戦争を考える

カンダハールで戦争を考える

監視必要！50億ドルの使い道

上：カンダハール空港には軍用ヘリが駐機していた
中：米軍が「仕掛け爆弾通り」をカット
下：「仕掛け爆弾通り」を猛スピードで突っ走る米軍の装甲車

アフガニスタン南部の都市カンダハールを、昨年と今年、2回訪れた。カンダハール周辺は治安が極度に悪化し、今や陸路で行くのは自殺行為。外国人が乗った車を発見されれば、よくて拘束、悪くて殺害である。ちなみに地元の人々も陸路で行こうとする人はめっきり減ったので、必然的に空路、つまり飛行機は満席状態となる。

カンダハール空港は、沖縄の普天間基地とは真逆の基地である。普天間は民家の中にあって、戦闘機は小学校の屋根すれすれに着陸してくる。カンダハール空港は、周囲数キロにわたって何もない広大な土地に位置している。民家はもちろん一本の木も生えていない。

なぜか？

民家や高木があれば、その物陰に隠れて武装勢力がロケット弾を放つから、治安維持のために周囲の障害物を取り除いているのだ。

カンダハール空港内部には米軍基地があって、訪問時には、基地をせっせと拡張していた。オバマ政権はアフガニスタンに3万人もの米兵を増派したが、そのほとんどはこの秋から「カンダハール掃討作戦」を行う予定なのだ。

カンダハール空港と市内を結ぶ国道は、通称「仕掛け爆弾通り」と呼ばれている。米軍の戦車や装甲車が頻繁にこの通りを通行するので、タリバンが仕掛けた路肩爆弾がよく爆発する。

覚悟を決めて「仕掛け爆弾通り」を通行する。すれ違うのは重機や建設資材を積んだ大型トラックだ。

おそらくカンダハール基地の建設工事は、米軍、つまりペンタゴンが資金を出すのだろう。しかしその基地に通じる道路、道路に敷設される上下水道、基地に引き込まれる電気やガスなどは、「アフガン復興費」から出されるのではないか？

鳩山前政権がオバマ大統領に約束した50億ドル（約4500億円）という巨額の支援金が、こうした米軍関連工事に使われるおそれがある。「アフガニスタンの人々のために道路を整備しました」「上下水道を引き込みました」と聞けば、多くの人は「日本も貢献したんだな」と感じるだろう。しかし実際は私たちの貴重な税金が、米軍のために使われてしまうことになる。

カブールで建設中の高級マンション。貧富の差が広がっている

高級マンションと避難民キャンプ

避難民キャンプの子どもたちや、誤爆されて障害を負った人々に使われるのなら、お金を拠出する値打ちもあるが、米軍やカルザイ政権の賄賂に消えてしまうとなれば、援助などしない方がマシだ。私たちはこの50億ドルがどのように使われたのか、しっかり監視する必要がある。現金には色がついていないのだ。

私はこの10月にも6度目のアフガニスタンを訪問する予定だ。

普通の市民が空爆と銃撃戦で、家や親族を失っていく一方で、米軍関連の建設工事や麻薬で儲けた人々が、首都カブールにおしゃれなマンションを建てていく。

圧倒的な格差が戦争の引き起こしたもう一つの側面だ。新自由主義、つまり「儲けた者勝ち」の行き着くところ、それが戦争なのだろう。

フリージャーナリスト　西谷文和